

Neues in Nara

Nr. 83
2023年4月25日



Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara (JDG-Nara)

奈良日独協会 (会長 河野良文) 奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

Tel/0742-61-6312, Fax/0742-61-0473

<http://www.daianji.or.jp/jdgn/index.html>

編集委員：林 (hayashiy@zeus.eonet.ne.jp)、峯本 (hmine-24@m3.kcn.ne.jp)

編集委員より：会員の皆様からの積極的なご投稿をお待ちしています！

●行事予定

1. 奈良日独協会・2023年度年次総会、及び講演会を開催します。

日時：5月21日(日)

年次総会：13:00~14:00

講演会：14:20~15:20

場所：大安寺催事棟

講演会の講師は、天理大学名誉教授の浅川千尋先生(会員)です。会員の皆様万障お繰り合わせのうへご出席願います。

尚、2023年度の会費(個人 2000円、法人一口 4000円)の納入手続きを頂きますよう、よろしく願います(同封の総会案内参照)。

2. 全国日独協会連合会総会・分科会

東京で4月21日~22日、開催されるのにもない、当会より中祢勝美理事が出席の予定。

●行事報告

1. 第28回シュタムテイッシュ

「ドイツ・ボードゲーム」

3月5日、大安寺催事棟で芹沢友香理事がドイツ留学時代に習得されたボードゲームが披露され、会員11人が日頃の雑事を離れて楽しいゲームに興じた。想像以上に奥の深いゲームですので、会員の皆様も是非トライされたら如何でしょうか(上記写真参照下さい)。

2. 岡田由美子さんの「朗読コンサート」

当会会員・ソプラノ歌手岡田由美子さんの「朗読コンサート」が3月5日(日)「なら100年会館」で開催され、多くの岡田さんファンが詰めかけ、満員の大盛況であった。

●新入会員

酒井恵子さん(奈良市在住)が入会されました。

●特集 河野清晃前会長「訪独の印象記」

河野清晃前会長が1962年西独政府から招待され、ドイツ・スイスを一ヶ月ほど訪問された訪問記(「高野山時報」掲載)を、中祢理事より提供頂きました。当会の歴史を伝える貴重な資料ですので、会員の皆様に別添の通りお届けいたします。是非ご一読ください。

●会員だより

林保之さんから

「大安寺での出会い」

始めて大安寺を訪れたのは奈良に転勤した48年前の1975年でした。

ドイツの製薬会社バーリンガーインゲルハイム社(BI社)の日本法人に勤務し同社のカレンダーを河野清晃貫主に届けるためであった。庫裡に通され”ご苦労さん”と気さくに話しかけて頂き、時には近くのファミリーレストランで食事をしながらドイツとの交流話を伺い、年末の大安寺訪問が楽しみとなりドイツへの興味が湧きました。大安寺での会社幹部が参列したBI社主の法要にも同席しました。

その後、ドイツ本社駐在員として1980年に約1年間ドイツに滞在しました。この間、Goethe-Institutでの語学研修や、Ingelheimでの本社勤務でドイツの風を体感したことは貴重な経験となりました。

これが契機となり、営業職から本社に異動し企画部門など様々な職種を経験しました。

退職後の2002年、ゴルフの帰路20年振りに大安寺に立ち寄り、境内で河野会長に出会いました。初対面でしたが”奈良日独協会に入りませんか”と声をかけられ入会しました。枚方からの越境会員ですがいろいろな行事の参画や広報誌編集に関らせて頂き、退職後の生活に張りがで感謝しています。

協会活動から離れていますが、今年1月には地元枚方で高齢者を対象とした福祉行事に会員の岡田由美子さんを招いてのコンサートを開催しました、会員繋がり協力頂きました。これも大安寺での出会いのお蔭です。



岡田さんを招いてのコンサート会場にて花瓶は私の陶芸作品です=2023年1月

特集 河野清晃前会長の「訪独の印象記」(1963年)

今から60年前、『高野山時報』に掲載された河野清晃前会長(1906~2001)の文章を転載します。西独政府から授与された一等功労十字章の副賞として同国に招待された際の印象を綴ったもので、当協会設立のきっかけを作ったトラウト先生への思いや宗教者ならではのまなざしに心打たれます。(中祢記)

「訪独の印象記」 奈良日独協会会長・大安寺貫首 河野清晃

西ドイツ政府からお招きを受けて1962年4月18日から1ヶ月半訪独の旅に出た。一行は前北海道大学々長大野精七博士(76)、徳島県知事原菊太郎氏(72)、大分県知事木下郁氏(68)と私(55)の4人で、通訳官綱島政吉氏(ドイツ大使館付)と徳島県秘書課長岡本賢次氏等の旅であった。

独国ルフトハンザ社のジェット機で羽田空港を出発、ホンコン、バンコック、カルカッタ、カラチ、ダーラン、カイロ、ローマに立寄りフランクフルトへ向った。

出発する前夜井上靖氏の著『天平の甍』を読んだ私は機中で1200年前に決死の覚悟で当時の先進国の唐を訪れた大安寺の僧普照、興福寺の栄叡ら留学僧の面持を思い浮べていた。先師達はあらゆる苦難を乗り越えてたどりつき命をかけて求道研鑽し故国での啓蒙に役立ったのであった。ところが私はいまその支那や印度の上空を何の苦勞もなくマンガーをかじりながら通過している。現代の最先進国でしかもキリスト教国から日本僧として招かれている。それを思うと何とありがたいことだと祈りに似た気持ちに包まれた。

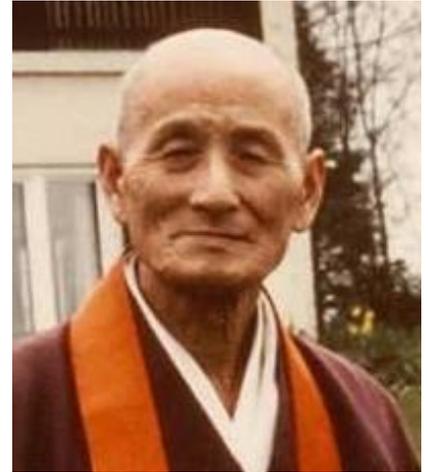
19日朝フランクフルト着、フランス機に乗り換え1時間でミュンヘンに着く。私たちのドイツの旅はまずビールの本場から始まった。ミュンヘン、ベルリン、ハノーバー、ブレーメン、ハンブルグ、エッセン、ボン、ウィースバーデン、フランクフルト、ハイデルベルク、カールスルーエを公式の3週間の訪問で、後半の3週間はフランクフルト郊外に住むロスバッハー夫人(30年前からの友人)の家に滞在して自由に大野博士と二人でマールブルグ、フライブルグ、仏国のコルマー、スイスのチュリッヒ、ツエルマット、グリンデルワールドに滞在し聖峰に登り再びフランクフルトに帰ってケルン大学を訪ねた。

ドイツに着してまず深く感銘した事は何処にも古い立派な教会があり、又新しく開け行く団地、住宅には天幕張りの大きな仮教会が新設されて老若男女が聖堂に満ち満ちて敬虔な祈りを捧げている姿であった。市でも田舎でも素晴らしい建物は教会の聖堂であり、又その直営の学校、国際学生寮、青少院野外活動の施設キリスト教の同窓会があり、教会が生き生きとして社会生活と直結しているのは、真にたのもしき姿であった。

日本では宗教の対立、異教徒の激しい論争の多い邪教横行の今日ドイツではカソリックとプロテスタントの中の広い教線拡張、布教の状態を見ると心うたれるものがある。ドイツの友人の話によると、異教徒の国から仏教の貴僧が公式に招待を受けたことは開国以来で誠に名誉であり、キリスト教徒がそれだけ時代と共に進歩したことを証するとの事であった。

ドイツ人は何れもが宗教の問題には大なる関心をもっており、この研究が盛んになり、ウルムにはドクトル・ウイヘルム・グンデルト教授が80才の高齢で天龍寺の平田精耕師と『碧巖録』に真剣に取り組んでおられる。

又ヘッセン州のマールブルグ大学ではドクトル・ハイラ教授が高野山大学の上田閑照師を助手として仏教学に精進され、この市のお城を宗教博物館となして仏教関係の蒐集品を多く収蔵され、先年三笠宮様がこの講堂で出講せられたところである。又ボン大学に私の恩師ドクトル・F. M. トラウト教授の高弟で小生の兄弟子になるドクトル・H. ツアヘルト教授によって日本語学と共に仏教学の研究が盛んに行われ、留学生も沢山集まっている。戦禍をまぬがれて完全に保管されたトラウト文庫をツアヘルト博士は案内された。私が京都日独文化研究所にいた時の先生の蔵書がそのままずらりと架蔵されてなつかしかった。そのとき故トラウト先生の御持言の「日独文化交流のかけ橋たらん」の具現を感銘し、私が出発前に各本山、諸先輩から寄贈せられた沢山の本をこの文庫充実に贈呈することを約した。帰国後8月2日パンアメリカン航空社赤田支配人の御好意で英文毎日新聞社の笹井氏が持参して同文庫のツアヘルト教授にとどけて頂いた。この後は更に贈書をつづけて日独文化の交流につとめ、将来仏教研究のヨーロッパにおける根本道場となることを確



河野清晃 前会長

信じて努力したいと思っている。

その他ハンブルグ大学にはオスカー・ベンル教授により、ベルリン自由大学にはエックルト教授、ミュンヘン大学にはハンミツ教授等それぞれ日本語学と共に仏教の研究が盛んに行われている。旅行中はどこでも禅について仏教に関する話を頼まれて時間のあるかぎり講じたが、今後留学する人は少なくとも一般仏教の概論と坐禅を心得ておくとドイツ人から尊敬されることを附言する。リュックケ大統領、アデナウアー首相その他友人達に大洞良雲大老師 89 才の染筆の軸やら色紙を贈呈し大変よろこんでいただき、又何処のゲストブックにも私は矢立を持参していたので毛筆で署名したが、墨書について近時興味をもっているのよ

ろこんでくれた。
公式の訪問の最後はカールスルーエの故トラウツ先生の墓参であった。老夫人が駅まで出迎えてくれ、23 年ぶりの再会で涙を新たにし、新調持参の大衣に着替えてリュックケ大統領からいただいた勲章をトラウツ先生の霊前に供え、香を薫じて長い学恩に感謝の祈りを捧げた。駅の前にある日本公園に高野山で作って送った町卒塔婆が先生からカールスルーエ市に寄贈されて市の人々に愛されて立っているのも懐しかった。この五輪塔の基壇に日本文字で独国、日本と彫ってその間に橋を浮彫りにして先生の御持言を表しています。



カールスルーエのトラウツ博士の墓参をされる前会長ご夫妻

私は公私とも旅行中は軍人墓地に香を献じて読経して殉国英霊の供養を行い世界平和の実現の祈願をなし、必ず持参した大安寺の銀杏の苗を植えて記念した。

又大統領官邸、首相公邸、外務省、各大学、日本の大使館、総領事館、各植物園、ゲーテハウス、ベートーベンハウス、友人の家には銀杏の苗を贈って記念植樹させてもらった。植木をことの外愛するドイツ人はどこでも大変に感謝をしてくれ、特にゲーテハウスのその記念館々長には大変喜んで戴だいた。詩聖ゲーテは植物学者としても一家をなし、1754 年この町の商人の庭でギンナンの木を見つけ葉が二つに分れてしかも一であるということに深い意味を認めて愛の象徴としてギンナンをたたえる詩を作ったところから特に私をゲーテ会の客員録に署名した。ゲーテが愛したギンナンの葉が今もなおこの博物館に保存されています。然し銀杏の木がないこの庭に東方からはるばる貴僧が持って来て植えて頂いたことは二重のよろこびです。注意して大切に育ててゲーテ訪問者に陰を与えることを希望します、と感謝された。

最後の一週間はスイスに入りチューリヒの友人を訪ねて翌日ツエルマットへ。平和の国スイスで汽車に乗るたびに兵隊がうようよしているのは一つの驚きであった。ツエルマットはマッターホルンの麓の田舎町で、ここからまた電車で標高 3000 余米のゴーンネルグラーの峰へ、白雪に覆れた山頂で山岳遭難者の供養と世界平和祈願のため光明禅三昧の瞑想を白雪に坐して修し山の爽快さは何ともいえず生きることの幸を心から感銘した。この山頂で見なれぬ僧衣の服装で坐っている日本人に興味を持ったらしい約 30 人の登山者から大野博士を通じて禅の話をせがまれた。この人達の国籍は北欧あり、共産圏ありで計 10 余カ国に及ぶ多彩で、この人達に私は「こうして山の靈氣に打たれながら仲よく集まって楽しい時間をすごすことのできることは世界平和の第一歩である」と述べた事であった。3 日間このホテルで滞在して心のゆく儘に靈氣にうたれてグリュンデルワルトに足をのばし、秩父宮をご案内した、又日本の登山家から親しまれているエミール・ストイリー翁のホテルに滞在し、かつて榎有恒さんが初登頂で有名なアイガーやユングフラウにも登り、雪山に囲まれた、すがすがしい雪を踏んで、又氷河上に坐して、遠く 3000 年前、釈迦が雪山での 6 カ年の修行を再想して、私の前途の多難を再確認させてもらった。この山籠の修行によって「天下一家」であり「民族は一つ」かつ「教は一つ」の結論を得てこれからの半生は、精神革命の尊い仕事に奉仕することを誓った。

再び下界に戻り、チューリヒ空港からブリガッテ君に見送られて帰朝した。フランクフルトに 30 年前来の古い友人先輩たちの心づくしの会に連日招せられて元気で帰朝した。

この旅行はドイツ政府のいたれりつくせりの大歓迎の旅で、一通り西独の主要都市の驚異的復興を親しく拝見し、又主要人に会い誠に意義深き親善の訪独であった。ただ東西ベルリンが不幸な壁で非人道的な仕うちの中から一日も早く解かれることを祈った。最後にドイツの皆さまへ感謝の誠をささげ、日独親善の実をあげることを誓う次第である。

(『高野山時報』昭和 38 年 5 月 1 日 (第 1637 号) より転載。転載にあたっては、奈良日独協会の河野良文現会長、河野恵美子顧問ならびに高野山出版社からご快諾を頂きました。心からお礼申し上げます。)